



巻頭言

科学コミュニケーター

●
毛利 衛 Mamoru MOHRI
日本科学未来館 館長



緑色の蛍光を放つ化学実験は下村さんのおかげで多くの子供にも大人にも化学の面白さを伝えた。化学の魅力のひとつは分子レベルの反応が五感で観測できる変化となって私たちを驚かすことにある。子供たちにとって自然を相手に五感をとぎすます機会が遠のいた今、人工的にそのような仕掛け作りが必要である。そこで培われた好奇心が人類社会に新しい科学技術イノベーションをもたらす引き金になるからだ。その仕掛け人として「科学コミュニケーター」の存在に注目したい。

一方、インターネットの普及により、あたかも実験をしたかのような錯覚を起こさせることも可能になった。しかしそれはあくまで仮想現実であり、その科学技術情報が本当に事実で正しいかどうか、ネットのなかでは確かめることはできない。そこで皆が信頼できる顔の見える説明者としての「科学コミュニケーター」にも注目したい。最先端の科学技術をもとにビジネスと結びつき個人の生活を急激に変革してゆく生命科学やナノテクノロジー分野、あるいはこれと対照的に個人ではすぐに変化は感じられないが確実に人類社会に影響するグローバルな環境問題に関する判断は専門家でもない限り、極めて難しい。しかも、良否の最終判断をするのは、一般の個人に任される。この溝を埋めるため、研究者は自ら一般の人たちとコミュニケーションを交わす必要があるが、専門家としてさらに先端を究めるために自分の時間と能力を使いたいという矛盾がある。そこで研究者と市民とのコミュニケーションを促進する役割としての「科学コミュニケーター」も必要となる。

理工系の大学院を修了しても研究者になれる数は限られているし、必ずしも皆が研究者に適しているわけではない。また、研究者としても学際領域を学ぶためには広い科学技術分野、並びに社会での役割を実感する必要がある。これらの点においても理工系大学院生の新しい能力の発掘場、あるいはポストドックのキャリアパスとして「科学コミュニケーター」をうまく利用できる。国の科学技術政策である第3期科学技術基本計画では「科学コミュニケーター」の人材育成の必要性が示された。日本科学未来館では、過去8年にわたり最先端の科学技術と社会を結ぶ展示の企画制作と解説の現場を通して「科学コミュニケーター」を養成してきた。科学技術創造立国を標榜している日本で世界に先駆けてこの人材をうまく機能させることが可能だ。学校や社会での科学教育、科学技術のビジネス展開に役立つばかりでなく、さらには科学技術外交による日本の国際貢献で活躍する若者の輩出へ直接つながる大きな人材開発プロジェクトである。

© 2009 The Chemical Society of Japan